

知ってよかった

自立活動

～指導に活かせる8つのヒント～



大阪府立堺支援学校

はじめに

“特別支援教育”が提唱され、障がいの有無に関わらず、支援を必要とする子ども達への“生活面や学習面に対する理解と対応”が幅広く行われるようになってきました。

幼稚園や小・中学校、高等学校等で、それぞれの子どもに応じた指導・支援を先生方とともに検討するなかで、「車いすの子どもの学習姿勢が気になる」「乱れた字を書く。丁寧に書いているのに、どうして?」「重度の子どもは、何を目標にすればよいかわからない」といった声がよく聞かれるようになりました。

学習の不足による習熟度の違い、つまり“教科指導の視点”だけでは解決しにくい課題が増えているように感じます。

そこで、私達がお勧めしているのが、“自立活動の視点”を加えて、子ども達の課題を捉えなおしてみることです。

ここでは、園や学校でのよくある相談についてとり上げ、8つのヒントとしてまとめています。

“そうだったのか、なるほど”から、“よし、やってみよう!”へのきっかけにして頂ければと願っています。お役立ち情報もあわせて、是非ご活用下さい。

目次

はじめに

よくある相談 Q&A・・・3～18

お役立ち情報・・・20～29

- 特別支援教育とは
- 自立活動について
- 課題・目標設定のための6区分チェックツール（抜粋）
- お役立ち体操
- 誤嚥について
- AACについて
- 物の握り方の発達

おわりに

Q1

教材を示すと見ているようですが、手をのばしません。

肢体不自由とは、単に動かさないのではなく、「意のままにならない」状態を含みます。さまざまな形の不自由さがあります。

- 1 力が入らなくて、動かしたいのに動かすにくい
- 2 力が入りすぎて、思うように動かさない
- 3 思った以上に動いてしまう
- 4 揺れてしまう

興味はあるけれど、1や2のように、動かさないのか、単に興味がないのか、動きの特徴と興味関心をあわせて予想していく必要があります。それぞれのタイプによって、教材の示し方や、動きに対する支援・援助の仕方がかわります。

A1 力が入らなくて動かすにくい場合

腕を支えて動かす、一緒に物に触れる支援をします。この際に、できるだけその子の動きを大切にしましょう。また、対象となるものをしっかり見続けることができるように、頭の向きも支援したり、物を示す位置を工夫することも大切です。



A2 力が入りすぎて、思うように動かさない場合

全身に力が入っていることがあります。肩などを揺らして全身の力を抜き、全身に力が入りにくい姿勢になるよう支援した上で、A1のように腕の動きを支援します。

Q2

車椅子を使用している生徒の姿勢がくずれてしまいます。また長時間座っていると腰やお尻の痛みを訴えます。どのような工夫をしたらよいのでしょうか？

くずれた姿勢や同じ姿勢を長く取り続けると、身体の同じ部分に圧がかかったり、限られた筋肉が使われたりすることが原因で、腰やお尻などに痛みが出ることがあります。

その他、関節の動きが悪くなったり、筋肉が硬くなったり、背中に側弯が生じたりと身体にさまざまな弊害がおこる危険もあります。

A 姿勢がくずれる対応として

★ 椅子や机（テーブル）の高さ等を合わせる

良い椅子の高さ等の基準 … (図1)

座面高：足裏全体がしっかりと接地している

奥行き：膝の後ろの隙間が座面から約 2.5 ~ 5 cm

机高：肘が十分に曲がり、肩が上がらない高さ

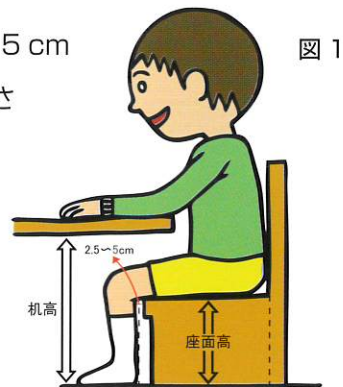


図1

★ 姿勢を戻すことや保持ができない場合は、筋力の不均等や弱さを補助する目的で、ベルトの使用や、腰や脇の横などにクッションを入れて姿勢を支える・・・(図2)

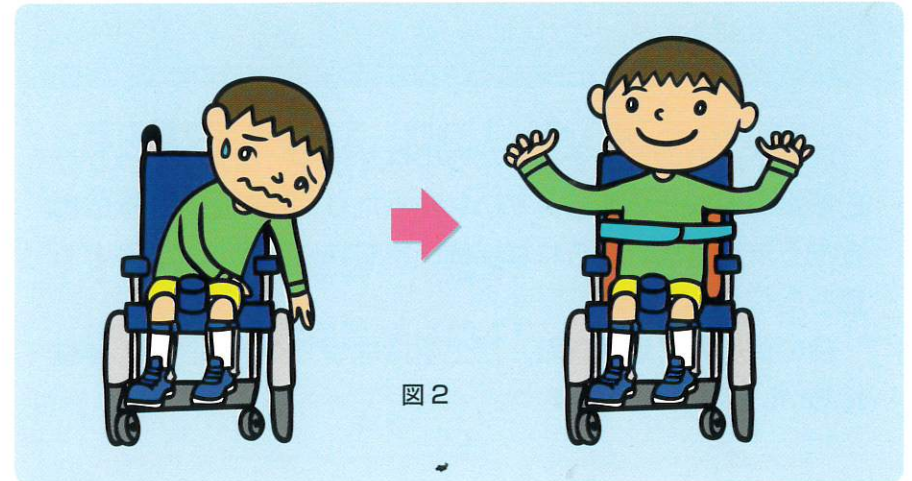


図2

★ 上体のくずれを戻すだけでなく、腰や脚も正しい位置になるように座りなおす

★ 姿勢を保つ腹筋・背筋などの力をつける など

* からだを動かす体操や、さまざまな姿勢をこまめに取りるようにすることで、腰やお尻の痛みを軽減できる場合があります。

(お役立ち情報参照 P24・25)

Q3

文字を書くときにマスからはみ出したり、読めないくらい形が整わない文字を書くことがあります。どのような指導をすればいいですか？

肢体不自由のある子どもたちのなかには、目線がしっかりと鉛筆の先をとらえられていなかったり、目の動きと手の動きをうまく協調させられない等、視知覚に問題のある子ども達もたくさんいます。

目の使い方（眼球運動）が上手になってくれば、手の運動にもいい影響を与えます

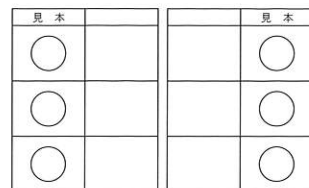
A1 見る力を伸ばす工夫

- ★ **姿勢の安定**……机、椅子の高さを合わせる
カットアウトテーブル、傾斜板の利用（参照 P6）
- ★ **道具の工夫**……ペンホルダー等（参照 P18・19）の利用
書き取り用の補助枠を利用
- ★ **環境を整える**……机上の物や教室内掲示等の整理、照明の調整
プリントの工夫（拡大コピー、枠線、補助線、色を変える等）

① 一画目や部首の色を変える



② 見本の位置の工夫

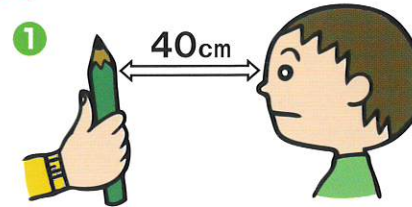


（右利き用）

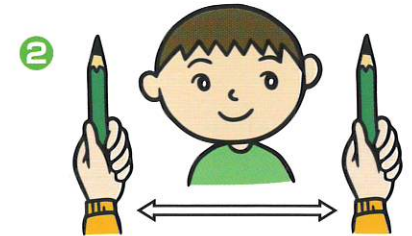
（左利き用）

A2 簡単にできるトレーニングの方法

★ 眼の動きの練習

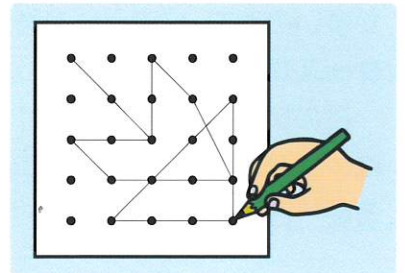


40cm 手前にペンを持ち、子どもはペン先を見つめる

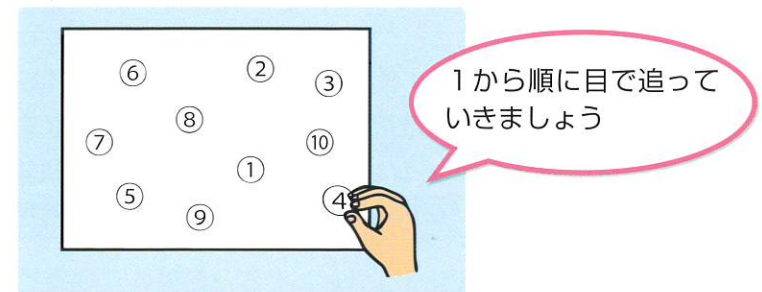


ペンを左右、上下に動かし、子どもは目でペン先を追っていく

★ 点をつないで字や図を作る
（市販のものでは、
ジオボード等がある）



★ 文字表を見て、特定の文字や単語を探す
50 音順、数字を順に探す



★ ブロックで見本の形を再現する

Q4

小学2年生の女の子です。こちらが言っていることはだいたいわかっているようですが、時々、何かを訴えるように大きな声を出したり、泣いたりします。本人の気持ちをくみ取れる良い方法はないでしょうか。

コミュニケーションには、“理解”と“表出”の両面があり、障がいのある子どもは、理解面と表出面の手段が異なる場合が多いのです。“ことばを理解していても、話せない”というケースがまさにそうです。

この場面は、“伝えたいことがあるのにその手段がないために、自分にできる精一杯の方法（泣く）で伝えようとしている姿”とも考えられます。

コミュニケーションの手段はひとり一人違います。適した手段を身につけ、よりスムーズに、楽しくコミュニケーションできることを目指しましょう！

AAC：補助（拡大）・代替コミュニケーション（お役立ち情報参照 P26）の考え方にに基づき、他者とやりとりするための実用的なコミュニケーション手段の獲得がのぞまれます。

（P26 参照）

A AACでコミュニケーションしましょう！

★表出面の工夫『本人の意思をくみとろう！』

コミュニケーションブックを用いて、やりとり場面を設定して学習します。写真や絵などを指さすことで、ことばがなくても、自分の意思や要求を伝えることができます。関わり手も、本人の気持ちをくみ取ることができ、双方向のコミュニケーションが成立します。



★理解面の工夫『本人にわかるように伝えよう！』

ことばだけでは十分に理解できにくい場合は、「ことば+身ぶり」「ことば+写真」のように、ことばに補助手段を加えて伝えると、本人の理解度が飛躍的に高まります。

参考文献：『コミュニケーションへの小さなヒント』
（こころリソースブック出版会）

Q5

ことばを話すことができないために、
クラスの行事や授業で、主体的な活躍が
なかなかできない生徒 A さんがいます。
何か、いい方法はないでしょうか？

スイッチを押すと録音した音声が出る携帯型会話補助装置 (VOCA:Voice Output Communication Aid) を使って、みんなに言いたいことを伝えることで、ともに活動に参加することが可能になります。



A1 クラスでの取り組みとして

例えば、A さんに、クラスでの毎日の「登校後、下校前の連絡会」や「授業」の前後のあいさつ係をしてもらってはどうか。「起立」「気をつけ」「礼」という音声が出る仕組みの携帯型会話補助装置を使えば、クラスの皆が自分の指示に従って動いてくれるという喜びを味わうことができます。

A2 行事での取り組みとして

例えば、「がんばれ~」という音声が出るようにしておいて、体育大会で、お友だちを応援することができます。「フレイフレー、あ・か・ぐ・み」という音声を入れたら、応援団として、皆に合図を送ることも出来るでしょう。

このようなことを出発点にして、様々なコミュニケーション機器を主体的に活用して、自らの意思が相手に伝わる喜びを体験することが大切です。こうした体験を通して、まず、話したい・伝えたいという意欲を高め、ことばに代わるコミュニケーション手段の獲得へと、つなげていく方法もあります。

Q6

重度重複の肢体不自由児から興味・関心を引き出すには、どのような教材がいいのでしょうか。

肢体不自由児は、物に近づいたり、手をのぼすことが難しいために、「見る」「聞く」「触れる」力が育ちにくい傾向があります。

「見る」「聞く」ということは、「見えているもの」「聞こえているもの」の中から一部のものや音を選択して意識を傾けることです。選択する力が弱い場合、情報の刺激を強くして選びやすくします。

A1 注意が向きやすいもの

★ 原色のもの

(※赤色がわからない場合もあります)

★ 光など明暗のはっきりしているもの

頭を十分に動かさなかったり追視できない場合は、視野に入る大きさが適当です。

(※木漏れ日などのようにちらちら光るものは、発作を引き起こすことがあるので、注意が必要)

★ 高い音・低い音・大きな音・小さな音・「ぽよーん」など滑稽な音など、好みの音ができるもの

雑音をできるだけ減らし、静かな部屋で音を聞くようにしましょう。

(※特定の音域を不快に感じる場合もあるため注意が必要)

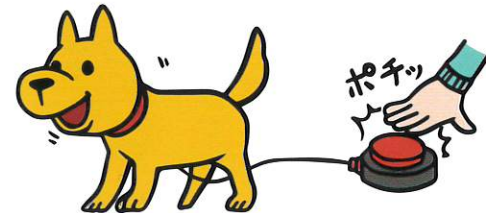
A2 ふれると結果がわかりやすいもの

★ 強い刺激のもの

暖かい・冷たい・ぬるぬるする・重たいものなど

★ 変化が起きるもの

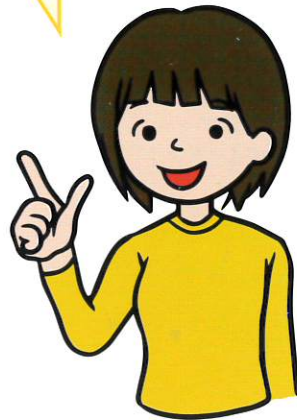
ふれたら、形状が変わる・音がする・画面が変わるものなど
(※変化がしばらくしてからおきるのではなく、即座におきるほうが、因果関係の理解がしやすくなります)



Q7

食べやすいように具を細かくした味噌汁やお茶づけにしたご飯を食べさせていますが、よくむせます。むせないようにするには、どうしたらよいでしょうか。

食物形態によって食べ物が食道に流れ込む時のスピードが違います。むせは、そのために起こっていると考えられます。お茶づけやみそ汁のように、具（固形物）と汁（液体）が混ざった状態の食べ物は、飲み込みの難しい子どもにとって、危険なのです。（お役立ち情報参照 P28・29）



A

対策としては、汁物は、汁と具に分けて別々に食べること、普通のご飯では硬いという場合はお茶づけにせずに軟飯（水分多めのご飯：お茶碗1杯のご飯に、大さじ1杯弱のお湯を入れてふやかすだけでも良い）にすることを勧めます。

★ また、むせないで安全に食べるためには「姿勢」も重要ですので、下記を参考にしてください。

1 悪い例



✗ 背中中の延長線に対し、首が反っている

2 良い例



○ 背中中の延長線より、首が起きている

参考文献：『食べる機能の障害』（医歯薬出版）

Q8

ペンやスプーンがうまく握れません。
活動を行いやすくする道具や自助具を教えてください。

上肢の麻痺などにより、日常生活動作が困難な場合に、可能な限り自分自身で容易に行うことができ、より快適な日常生活が送れるように工夫された道具を自助具といいます。

また、ユニバーサルデザインといわれる誰もが使いやすい製品も市販されています。

A 食事道具の工夫 (スプーン、箸、お皿)

★ 握りやすいスプーン

柄を太くする (図1)

本人の握りの形にあわせた物を作る…樹脂等を使って (図2)

★ 口に入りやすいスプーン…柄を曲げる (図3)

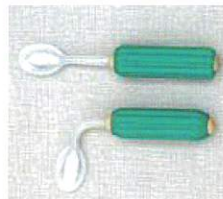
図1



図2



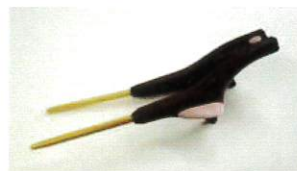
図3



★ つまみやすいお箸

2本の箸を連結し、指の当たる部分にガイドがついてある (図4)

図4



★ すくいやすい皿

内縁を立ててあるのでスムーズにすくえる (図5)

図5



★ 皿の固定—すべり止めシート

A 筆記具の工夫

★ 持ちやすくする市販の物

(ペンホルダー、太いグリップ、握りクレヨン、三角鉛筆等)



★ 本人の握りにあわせた物…樹脂等を使って



目玉クリップを使って



※どのような握り方がよいかは、子どもの握りの発達を見て検討します
(お役立ち情報参照 P30)

特別支援教育

「障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う」とされています。

対象：発達障がい（LD,ADHD,自閉症スペクトラム等）を含め、障がいのある全ての子ども

特別支援教育の教育課程

特別支援学校では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を行うとともに、障がいに基づく種々の困難を改善・克服するために、「自立活動」という特別の指導領域が設けられています。

特別支援学校	小・中・高等学校の教育+ 自立活動
特別支援学級	小・中学校の教育+ 特別の教育課程の編成ができる (自立活動)
通級による指導	小・中学校の教育+ (又はその一部に替えて) 特別の教育課程の編成ができる (自立活動)
通常の学級	実態に応じ、指導内容や指導方法を工夫することができる (自立活動 を参考にできる)

自立活動

自立活動の目標

「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」とされています。

自立活動の内容

人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素

+

障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素



- 1 健康の保持
- 2 心理的な安定
- 3 人間関係の形成
- 4 環境の把握
- 5 身体の動き
- 6 コミュニケーション

6区分 26項目
に整理・分類

「指導にあたっては、個々の幼児児童生徒に必要なとされる項目を選定し、それらを相互に関連付て具体的な指導内容を設定する」とされています。

参考・引用文献：『文部科学省 HP』・『特別支援学校学習指導要領解説』

お役立ち情報

課題・目標設定のための6区分チェックツール

堺支援学校では、チェック方式で子どもの課題を導き出す「課題・目標設定のための6区分チェックツール」を作成し、試行しています。ここでは、一例として6区分のうち「心理的な安定」「人間関係の形成」を掲載・紹介します。

心理的な安定

(1) 情緒の安定に関すること

<input type="checkbox"/>	○「快」「不快」の表出(体調や働きかけに応じて差のある表出をする)
<input type="checkbox"/>	○「快」の状態の継続
<input type="checkbox"/>	○体調、睡眠、生活リズムの改善という支援による環境の改善
<input type="checkbox"/>	○家庭環境・交友関係の自己管理等による環境の改善
<input type="checkbox"/>	○悩み・不安の表出による情緒の安定
<input type="checkbox"/>	○ヘルプの表出方法獲得等による情緒の安定
<input type="checkbox"/>	○スケジュール管理によるこだわり、常同行動軽減
<input type="checkbox"/>	○リラクゼーション方法の獲得によるこだわり、常同行動軽減
<input type="checkbox"/>	○興味関心の拡張等によるこだわり、常同行動軽減
<input type="checkbox"/>	○スケジュール管理による自傷行為、他害行為(パニック)軽減
<input type="checkbox"/>	○リラクゼーション方法の獲得による自傷行為、他害行為(パニック)軽減
<input type="checkbox"/>	○興味関心の拡張による自傷行為、他害行為(パニック)軽減
<input type="checkbox"/>	○気分転換・クールダウン方法の獲得等による自傷行為、他害行為(パニック)軽減
<input type="checkbox"/>	○環境設定による多動、注意転導の軽減
<input type="checkbox"/>	○スケジュール管理による多動、注意転導の軽減
<input type="checkbox"/>	○リラクゼーション方法の獲得等による多動、注意転導の軽減
<input type="checkbox"/>	○自己肯定感の育成による情緒の安定(失敗による二次的障害の回避、得意分野の成功等)

(2) 状況の理解と変化の対応に関すること

<input type="checkbox"/>	<不安解消のための状況理解>
<input type="checkbox"/>	○不安解消のための予理解(写真の理解学習、順番の理解)
<input type="checkbox"/>	○教室移動の際の空間認知力の向上 (目印を確認して行動する力等視覚障がいや空間認知の弱さによる不安への対応として)
<input type="checkbox"/>	○状況がわからない時に「教えてください」のヘルプの表出
<input type="checkbox"/>	<状況や環境の変化の受容と対応>
<input type="checkbox"/>	○状況や環境の変化の受容(予定の変更を受容するためのスケジュール管理など)
<input type="checkbox"/>	○状況や環境の変化への対応(人前などの緊張する場面での対応方法獲得など)

人間関係の形成

(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること

<input type="checkbox"/>	○受容:人の受け入れ(慣れた相手、初めての相手、対大人・対子ども等)
<input type="checkbox"/>	○受容:活動の受け入れ(身体的接触の受容、提案・要請の受容、個別・集団活動の受容等)
<input type="checkbox"/>	○他者からの働きかけへの対応(対応方法の習得)
<input type="checkbox"/>	○愛着行動の形成(慣れ親しんだ相手に対する行動:微笑む、泣く、抱っこ等)
<input type="checkbox"/>	○人との相互的なやりとり:からだを通したやりとり(くすぐり遊び、ぎっこんぱたん等)
<input type="checkbox"/>	○人との相互的なやりとり:物を介したやりとり(ちょうだいどうぞ、ボールを転がしあう等)
<input type="checkbox"/>	○人との相互的なやりとり:具体的手段を用いたやりとり(呼名への反応、質問⇔応答等)
<input type="checkbox"/>	○共同注意(“あれ見て”など、互いに同じ対象に注意を向ける)

(2) 他者の意図や感情の理解に関すること

<input type="checkbox"/>	○相手の感情・表情の理解
<input type="checkbox"/>	○ことばの意味や意図の理解
<input type="checkbox"/>	○ニュアンスの理解(声の抑揚、視線、ことば遣い等)
<input type="checkbox"/>	○場面・状況の理解
<input type="checkbox"/>	○自分の感情の理解(喜怒哀楽の区別や客観的把握)

(3) 自己の理解と行動の調整に関すること

<input type="checkbox"/>	○自分の特徴の理解(得意・苦手の意識、自己認知、等)
<input type="checkbox"/>	○集団行動に関すること(集団適応、一斉指示の理解・対応、合図・号令への対応等)
<input type="checkbox"/>	○自分の能力の理解(補助的手段の活用、他者への依頼、等)
<input type="checkbox"/>	○自己肯定感の向上(体験・経験の促進、できる・わかる学習活動の取り組み等)

(4) 集団への参加の基礎に関すること

<input type="checkbox"/>	○集団参加のための手順やルールの理解・対応
<input type="checkbox"/>	○必要な情報の得方(一斉指示の理解・質問⇔応答等)
<input type="checkbox"/>	○集団適応力の向上(他者との場の共有、“待つ”行動の獲得、他者との活動の共有等)
<input type="checkbox"/>	○他者への意図的な働きかけの促進(コミュニケーションの始発)
<input type="checkbox"/>	○ソーシャルスキルの獲得:社会的な言動の促進(挨拶、お礼、質問等)
<input type="checkbox"/>	○ソーシャルスキルの獲得:場に応じた適切な行動の獲得(困った時のヘルプの表出、その場から逃れる等)
<input type="checkbox"/>	○ソーシャルスキルの向上:アサーショントレーニング(自分も相手も大切にしたい自己表現方法、爽やかな自己表現)
<input type="checkbox"/>	○ソーシャルスキルの向上:場に応じた適切な言動の獲得(断る、拒否する、聞き流す等)
<input type="checkbox"/>	○会話の意図を理解する力:比喩的表現、社会的な言い回しの理解(ことばを字義通りに捉えてしまうケース)
<input type="checkbox"/>	○暗黙の了解(社会的な常識)などの理解力向上
<input type="checkbox"/>	○場面の背景を理解する力(事態の予測や、出来事の背景要因を読み取る力の向上)

「指導すべき課題」と判断してチェックした項目を関連付けて組み合わせ、「個別の教育支援計画」・「個別の指導計画」の目標や指導内容に反映させていただきます。

詳しくは、堺支援学校自立活動専任スタッフまでお尋ねください。

お役立ち体操

① 座った姿勢で行える体操の一例

- 上体を前にたおす（前屈）
- 上体を横にたおす（側屈）
- 上体を反らす…（図1）
- 体をひねる体操 等
（*棒やタオルを持って行う方法もあります）
- お尻を持ち上げる体操…（図2）
（腕の体操だけでなく、床ずれ防止にもなります）

図1

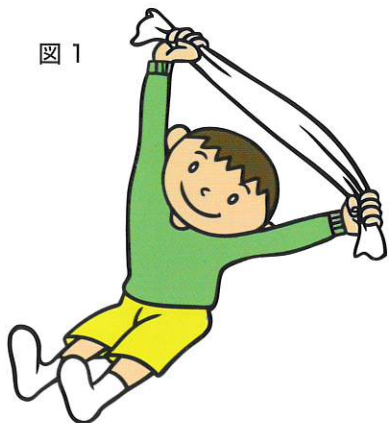


図2



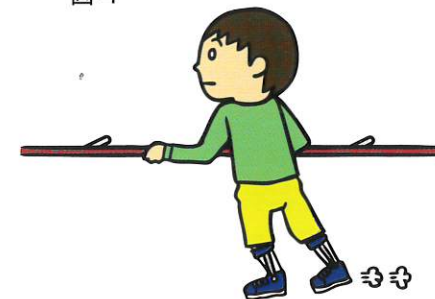
② 姿勢変換（座った姿勢以外のさまざまな姿勢をとる）の一例

- 床に降りて横になる（仰向け、横向き、うつ伏せ）
- 寝返り運動
- 立ち上がり反復運動…（図3）
- 歩行などの全身運動…（図4）

図3



図4



AACについて

AACは、Augmentative & Alternative Communication の略で、日本では、補助（拡大）・代替コミュニケーションと訳されます。

AACは、“ことばに代わる、又はことばを補助する手段を用いて、よりスムーズにより楽しくコミュニケーションしよう!という考え方”そのものです。（*機器を使ったコミュニケーションではありません）

“その人が今もてる力”を活用して、いかに今すぐコミュニケーションを成立させるか、というアプローチなのです。

この考え方をふまえて、教育・福祉の現場や家庭などでよく用いられているのが、身ぶりサイン、写真や絵・シンボル、文字、さらにVOCA (Voice Output Communication Aid) と呼ばれる携帯型会話補助装置などの手段です。それぞれの種類や特徴を紹介します。

身ぶりサイン

手話：日本手話など。身ぶりサインのなかでは、最もポピュラーなコミュニケーション手段です。

マカトンサイン：知的障がいのある人たちのために開発された身ぶりサインです。語彙数を最小限にしぼり、簡単な動作で表せるように工夫されています。（日本版）

シンボル



PIC (Pictogram Ideogram Communication)：

黒色の背景に白色のシルエットでシンボルが描かれているので見やすく、具体性が高いので誰にとってもわかりやすいのが特徴です。

Drops (The Dynamic and Resizable Open Picture Symbols)：



ドロップスは、愛らしいタッチのカラーイラストで、幼児や児童にも親しみやすいのが特徴です。コミュニケーションブックやVOCAのシート作成も容易になるよう配慮されています。

携帯型会話補助装置 (VOCA)

(パシフィックサプライ株式会社より)



ビッグマック：

1つの音声を録音・再生するシンプルなVOCAです。



ステップバイステップ ウィズ レベル：

メッセージを3グループに分けて録音でき、録音した順番に再生するVOCAです。



スーパートーカー：

メッセージは8レベル(8通り)まで録音が可能です。場面や活動に合わせたメッセージを録音しておくことができますので活用の幅が広がります。

参考文献：『コミュニケーションへの小さなヒント』

(こころリソースブック出版会)

誤嚥について

誤嚥とは

私たちが、食べ物をのみ込む時に、食道へ行かずに気道へ流れることを誤嚥（ごえん）と呼びます。

誤嚥の症状は？

食べたり飲んだりしている時にむせたり咳き込んだりすることは、誤嚥の基本的な症状です。

顔色や苦しそうな呼吸（肩で大きく息をする、鼻がヒクヒク動く等）をしていないか注意しましょう。

食べている最中や食後に唾液や痰でゼコゼコしてくるのも誤嚥の可能性あります。急な発熱を繰り返すようなら要注意です。さらに、誤嚥をしていても、咳き込むなどの症状があらわれないことがあるのです。誤嚥があるかどうかは、病院で検査をしてもらわないとわかりません。

誤嚥が続くと「誤嚥性肺炎」を引き起こす恐れがあり、命に関わることがありますので、適切な対応が必要です。

誤嚥を防ぐために

- ① 適切な姿勢
- ② 適切な食物形態
- ③ 適切な一口量・タイミング・リズム
- ④ 子どもがしっかり目覚めた状態で食べる意欲を持っている

◎教員はその日の体調に応じて、臨機応変に対応すること

食べる前からゼコゼコしている状態では、誤嚥しやすくなります。体調に合わせて対応し、無理に食べさせよう飲ませようとしなくていいことが大切です。

食べやすい食べ物とは

誤嚥しやすい

サラサラの水分

細かくバラバラな固形分

水分と固形分が混ざったもの
(味噌汁、お茶漬け等)



誤嚥しにくい

適度なトロミのある水分
(ポタージュ状、ゼリー状など)

まとまりのよい固形

汁物なら具と汁を分けて食べる

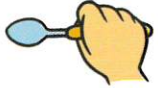
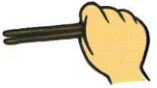










サラサラの水分や細かくてバラバラな食べ物は誤嚥しやすくなり、まとまりのよい食べ物は、誤嚥されにくいといわれています。

増粘剤の活用について

まとまりのよい食べ物を作るため、市販されている増粘剤が利用されています。水分をポタージュ状やゼリー状にしたり、食べ物にトロミをつけてまとめやすくします。トロミの状態は、その人の食べる力に応じて調整し、その日の体調によってもいろいろ変えることができます。

参考文献：『摂食障害 一指導援助の実際一』
(日本肢体不自由児協会編集・発行)

物の握り方の発達

	スプーン	箸	鉛筆
① 手掌握り (1~1.5歳)			
② 手指回内握り (2~3歳)			
③ 静的三指握り (3.5~4歳)			
④ 動的三指握り (4.5~6歳)			

物の握り方の発達に合わせた持ち方をすることで、上手に操作でき、さらに手の機能を発達させることができる

- 静的三指握り：肘を支点にして、手首や肘の動きで動作を行う
- 動的三指握り：小指、薬指が曲がり、③よりも安定して握れる
手首を支点にして、主に指先の動きで動作を行う

※それぞれの握りを安定させるために自助具の利用も考える

※①②の握りから③④の握りへの移行を促したり、三指握りを安定させるために、ピストル型の自助具を用いることがある(参照P18・19)

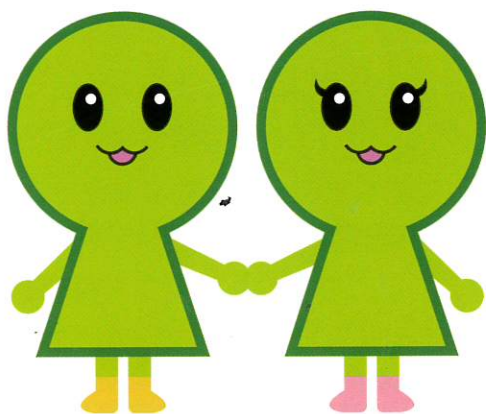
参考文献：『苦手が「できる」にかわる！発達が気になる子への生活動作の教え方』
(中央法規)

おわりに

“設定した指導目標に沿って教材も工夫しているが、なかなか学習が進まず子どものがんばりを活かさない”という経験はないでしょうか？

“これまでとは違う視点で子どもを捉えてみる”ことで、つまずきの要因が明らかになり、新しい手だてもみえてくるかもしれません。ここで紹介した自立活動のエッセンスも、その手だての1つとして活用頂ければ幸いです。

本校には、子ども達の力を引き出すための工夫に溢れたたくさんの教材や環境があります。見学や、より詳しい説明・相談は、いつでも歓迎です。是非、堺支援学校をお訪ね下さい。



知っててよかった 自立活動 ～指導に活かせる8つのヒント～

平成26年3月初版刊

発行元：大阪府立堺支援学校

〒590-0803 堺市堺区東上野芝町1-71

電話 072-241-0288 fax072-241-6140

HP <http://www.osaka-c.ed.jp/sakai-y>

編集：大阪府立堺支援学校 自立活動専任スタッフ イラスト：崎濱優多（堺支援学校職員）